

主 題：主に確信を置く者の平安

聖書箇所：詩篇 4篇

テーマ：主に確信を置く者はどんな苦しみの中でも平安を持って歩んでいくことができる

今朝私たちがともに学びたいみことばは詩篇4篇です。

詩篇4篇 指揮者のために。弦楽器に合わせて。ダビデの賛歌

- 4:1 私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。
- 4:2 人の子たちよ。いつまでわたしの栄光をはずかしめ、むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求めるのか。セラ
- 4:3 知れ。【主】は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、【主】は聞いてくださる。
- 4:4 恐れおののけ。そして罪を犯すな。床の上で自分の心に語り、静まれ。セラ
- 4:5 義のいけにえをささげ、【主】に投げ頼め。
- 4:6 多くの者は言っています。「だれかわれわれに良い目を見せてくれないものか。」【主】よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。
- 4:7 あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。
- 4:8 平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。【主】よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。

〇イントロ

紀元後69年スミルナ、現在のトルコで言うイズミルという都市にポリュカルポスという人物が誕生しました。彼は若いころからイエスの使徒のひとりであった、あのヨハネのもとで学び、彼の歩みはあらゆる面においてキリストの福音に根差したすばらしいものでした。ポリュカルポスはいつも主の救いを喜びとし、周りの人々にも熱心にみことばを伝えていました。しかし、今も昔もどんな時代にあっても、忠実に歩むクリスチャンには迫害があります。彼も例外ではありませんでした。彼が86歳だったある日、ローマの役人たちが自分を捕らえようと企てていることが友人の知らせによって耳に届きました。友人たちは恐れ戸惑い、彼に今すぐ逃げようと促しました。しかし、彼は彼らをなだめ、主に祈るのです。自分の身に危険が迫っていてもなお彼は平安を失うことはありませんでした。遂に彼のもとに武装したローマの兵士たちがやって来ます。ここで彼のとった行動は驚くべきものでした。彼は自分を捕らえに来た兵士たちを家に招き入れ、食事を振る舞ったのです。そして彼らにこうお願いします。「1時間、私に静かに祈る時間を下さい」と。目の前に自分の命を脅かす者がいても、彼の心は平安を失うことはありませんでした。祈りを終えたポリュカルポスはローマの地方総督のもとに連れて行かれます。そこで総督はキリストの信仰を捨てるようにと彼に強く迫ったのです。この状況にあって、この命令に背くということはそのまま死を意味するものでした。また、彼の周りも彼に罵声を浴びせる者や彼の死を望む者であふれ返っていました。平安を失っても仕方のないようなそんな苦難の中に彼は置かれていたのです。しかしその中で彼はこのように総督に答えます。「私は86年間、キリストに仕えてきましたが、彼は決して私に対して悪いことをしませんでした。どうして私を救ってくださった私の主を冒涇することができましようか」と。彼はこのような状況にあってなお、平安を失うことはありませんでした。そして燃え盛る炎の中で彼は殉教していったのです。

一体なぜ彼は平安を失うことがなかったのでしょうか？それは彼が主に揺るがぬ確信を置いていたからです。自分の主が一体どのような存在か、そのことを個人的に知っていたからこそその確信が苦難の中にある彼を勇気づけ心に喜びを与えました。信仰者の平安の基盤、それは主への信頼です。今回私たちが見るこの詩篇4篇はまさしくこの真理を私たちに教えてくれています。この詩篇には困難の中にあつて、主に確信を置いて歩んだダビデが平安に満たされていた様子を見ることができます。彼は主に信頼していたからこそ平安のうちに身を横たえ、眠りにつくことができました。そしてこの真理は今の私たちにとってもとても大切なものです。なぜなら私たちも日々の生活の中にあつて、さまざまな苦しみを経験するからです。小さいものから大きいもの、数多くの試練が私たちの身の周りにはあふれ返っています。愛する家族や友人が病気になったり、先が見えずに自分の心が不安や恐れでいっぱいになることがあります。職場や学校、そのような場所で不当に扱われ、心が落胆や失望を覚えることもあります。

私たちが罪を持っているがゆえに、教会の中であってなお心が傷つくような経験をすることもあります。この罪に満ちた世にあって、困難や痛みを経験しないで生きていくことは悲しいながら絶対にはかなうことのないものです。問題はそういった苦しみの中で私たちは変わらずに主に確信を置いて歩むことができているかということです。それぞれ自分の歩みを振り返ってみてください。苦しみを味わう時に疑念を抱くことはないでしょうか？先が見えない時、余りにも痛みが大きい時、余りにも自分が深い傷を負った時、神様、本当におられるのでしょうか、真実な神様ならどうしてこんなに私に苦しみを与えるのでしょうか、どうして私の祈りに答えてくれないのでしょうか、神様はこの状況さえも支配されているのだろうか、こういった思いを抱いたりほしないのでしょうか？そしてこのように疑いが心の中で増え広がり、主に対する信頼が揺らぐ時、私たちの心から安らぎを奪っていくことを皆さん経験したことがあるはずです。疑いでなくても、その状況に対して怒りや不満が積み重なっていく時に、同じように安らぎが消え失せていくことを経験したことがあるはずです。

○信仰者が持ち続けるべき三つの確信

主への確信が揺らぐ時、私たちには数々の問題が起こります。普段そんな苦しみを経験し、疑いを抱いてしまう弱い私たちに対して、ダビデはこの詩篇を通して大切な真理を教えてください。彼がこの詩篇を通して私たちに教えることは、信仰者が持つべき三つの確信についてです。信仰者が持ち続けるべき三つの確信をダビデはこのテキストを通して私たちに教えてください。ポリュカルポスもダビデも主に信頼を置き続けていたがゆえに、平安を失ってしまうような暗闇の中でも喜びを持って歩むことができました。私たちも同じです。この確信を覚えてきょうを歩んでいくのであれば、どんな状況にあったとしても私たちは心に安らぎを持って生きていくことができます。

私たちがこれから見るみことばが今苦しみを経験している人たちに、また私たちがこれから試練を経験していくその時に、励ましになることを心から願っています。

1. 主は祈りに答えてくださる 1節

さて、まずダビデが教える一つ目の確信が1節に記されています。「私が呼ぶとき、答えてください。私の義なる神。あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。私をあわれみ、私の祈りを聞いてください。」とあります。信仰者が持ち続けるべき一つ目の確信は、主は祈りに答えてくださるという確信です。苦しみに置かれている状況にあって、ダビデはまず主が自分の叫びに答えてくださることを切に祈り求めました。

この詩篇4篇を歌ったダビデが一体どんな苦しみを経験していたのか、その歴史的背景についてはいろいろな考え方があります。しかし、最も一般的に考えられているのは、この4篇が3篇の続きとして記されたということです。確かにこの二つの詩篇を見比べてみるならば幾つかの共通点を見て取ることができます。例えば主が祈りに答えられることを願うことばがどちらにも記されていることを見ることができます。3：4に「私は声をあげて、主に呼ばれる。すると、聖なる山から私に答えてくださる。」、4：1には「私が呼ぶとき、答えてください。」とあります。また、ダビデが主の平安のうちに身を横たえるということばも繰り返し使われていることを見ることができます。3：5に「私は身を横たえて、眠る。私はまた目をさます。」とあり、4：8に「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。」と書かれていることを見ることができます。こういったことを踏まえて、詩篇4篇は詩篇3篇と同じ苦しみを味わっていたダビデが読んだ悲しみの歌だと考えられるのです。

では、3篇でダビデがどのような苦しみに遭っていたのかを思い出してください。イスラエルの王であったダビデは自分の愛する息子アブシャロムや自分が信頼し、これまでさまざまな戦いで喜びや涙をともしてきた自分の兵士たちから命を狙われていました。また彼の民の多くも一緒になって反旗を翻し、ダビデは王としての地位も権力も財も、また国さえも失うことになりました。最も繁栄し、優れていた王が命の危機に瀕し、自分をののしる声に疲弊し、肉体的にも精神的にも追い詰められていて、荒野をさまよい歩いていたのです。このような希望の全く見えない絶望的な状況の中で、ダビデは前回見た詩篇3篇、また今回見る詩篇4篇を記したのです。

さて、そのようなひどい苦しみの中にあつたダビデがまずしたことは、主に心を打ち明け祈ることでした。1節で特に彼は主のことを「私の義なる神」と呼んでいます。ダビデはただ漠然と祈るのではなく自分が祈りを捧げる主がどのような存在なのかということをよく知っていました。彼は別の詩篇の中でもこのように記しています。詩篇11：7「主は正しく、正義を愛される。直ぐな人は、御顔を仰ぎ見る。」と言っています。ダビデは自分の主がいつも正しいことを行われる方、正義でもって間違いを必ずさばかれる「義なる神」であると確信していました。だからこそこう自分に言い聞かせるのです。今私は本当に苦しい状況にある。私に迫る敵は私のことで嘘を言ったり、ありもしないことで私のことを罵倒する。私の周りにはいる者は私のことをわかっておらず、今は不当な扱いを受けているけれども、これもすべて主が後に正しくさばいてくださる。私の敵が私に関してどんなことを言おうとも、どんなに間違つたこ

とを言おうとも、私の主は私が正しいことを知って、弁護してくださると。彼は神様が単に義なるお方だと知識で知っていたのではなく、この神様と個人的な関係を持っていたのです。

また彼は続けて1節の中にもこうも言います。「あなたは、私の苦しみのときにゆとりを与えてくださいました。」。ここで二つの大切なことばが用いられていることに注目してください。一つは「苦しみのとき」と訳されていることばです。これはもともと「狭い」とか「窮屈な」というイメージを持ったことばです。そして次に「ゆとりを与えてくださいました」ということばですが、これはもともと「広げる」とか「大きくする」という意味を持っています。つまりダビデがここで言わんとしたことを直訳すると、あなたは私が追い詰められ窮屈で身動きができなくなっていた時、そこに隙間を、そこに空間を設けてくださいましたと。少しイメージできると思います。私たちも自分の置かれている状況が刻々と深刻になり、恐怖や不安で心に余裕がなくなってくると、体が重く、身動きがとれなくなるような感覚に陥ることがあります。ダビデもそんな苦しみの中にいたのです。余りにも苦しくて動くことができない、余りの重圧に押しつぶされてしまいそうだと。しかし、主はそんな彼の心に働き、希望のない暗闇の中で押しつぶされそうになっていたダビデを苦しみから解き放ったのです。ダビデは神様がいつも正しく自分を弁護してくださる方、そのように信じていただけではなく、かつて苦しみの中から自分を救い出し、助け出し、自由を与えてくださったお方であることを心のうちに思い出していました。ダビデはサウルの手から逃れたその後もこれと同じことを言っています。詩篇18：19「主は私を広い所に連れ出し、私を助け出された。主が私を喜びとされたから。」と。ダビデは今置かれている困難に目を向けることよりも、かつて主が自分に対して何をしてくださったのかを覚え、その主があわれみをもって自分の祈りを聞いてくださることに信頼したのです。

では、皆さん自分の生活を振り返ってみてください。私たちが困難な状況に置かれた時、私たちはどんな神を覚え、どんなふうに神に祈っているのでしょうか？私たちが苦しみを経験する時に起こりやすいことの一つは、自分の状況、自分の経験している苦しみに心がとらわれ、その背後におられる神様の存在を忘れてしまうことです。考えてみてください。ダビデにとって「義なる神」は私たちにとっても「義なる神」です。このお方が昔も今も間違ったことは絶対にされないこと、間違ったことを正しくさばかれる「義なる神」であることを私たちひとりひとりよく知っています。主が「義なる」お方であるからこそ、たとえ誰かに不当に扱われたり傷つけられたりすることがあったとしても、私たちは自分でやり返すのではなく、この正しくさばかれる「義なる神」に委ねることができるのです。ローマ12：19にパウロは「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。それは、こう書いてあるからです。『復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。』」と記しています。

では皆さん、実際はどうでしょうか？自分の心を傷つけた人の行動、ことばを主に委ねているのでしょうか？それともいつまでも自分が傷つけられた場面が鮮明に頭に残って忘れられず、不平や不満、怒りを心の中で積み上げていないのでしょうか？一つ言えることは、私たちの心がこのような感情に支配されていれば、そこには平安などないということです。またダビデのことを苦しみから救い出すことのできた神は、私たちにとっても救いの神です。主は私たちを罪から救い出してくださっただけでなく、日々の生活の中に起こるさまざまな苦難や試練からも助けを与えることのできるお方です。でも実際私たちが押しつぶされそうになる時、私たちは真っ先にこの主のところに出て行って自分の思いを打ち明けているのでしょうか？主以外には自分を救い出すことができる方はいない、そんな熱心さをもって主により頼んでいるのでしょうか？それとも人やこの世の知恵プラス神様でしょうか？私たちの問題は神様について知識を持っていないということではありません。私たちの問題はその神様を個人的に知らないということです。どれだけ知識を持っていたとしても、自分の神として知っているかどうか問われるのです。ダビデは自分の主がどのようなお方を個人的に知り、必ず自分の祈りに答えてくださるという確信を持っていました。だからこそ、平安を持つことができたのです。私たちも同じ確信を持ってきょうを歩んでいくことができます。どんな苦しみの中にあつたとしても、主は私の祈りにこたえてくださる、そう期待しながらきょうを歩んでいくことができるのです。ここに私たちの平安があります。

2. 主が信頼に答えてくださる 2-7節

次に、ダビデの教える二つ目の確信が2-7節の中に記されています。それは主が信頼に答えてくださるといふ確信です。苦しみの中にあつたダビデはどんな時も主が自分の信頼に答えてくださるといふ確信を持っていました。そして、その主への確信はダビデ自身だけのものにとどまるのではなく、彼の周りの人々にも影響を与えていくようになります。覚えておいてほしいことは、私たちの持っている主への確信は私たちのうちにとどまるのではなく、私たちの周りの人に影響を及ぼすようになるということです。この2-7節の中には、ダビデが三つのグループの人々に対してそれぞれ呼びかけ、言葉を授けている様子を見ることができます。では一体どんなグループがいて、ダビデの持っていた確信はどんなことを人々に伝えたのでしょうか？

1) ダビデの権威を汚そうとする敵 2-3節

まず一つ目のグループは彼の権威を汚そうとする敵の姿です。彼の権威を汚そうとする敵に向かってダビデはことばを投げかけ始めます。まず2節に「人の子たちよ」とダビデは彼らのことを表現しています。このことばは別の箇所では「身分の尊い者、身分の高い人」を表す表現として用いられたりしています。要するに、ダビデを責め立てる者たちは身分が高く、富を持ち、影響力がある存在でした。そのような者たちが王であるダビデに尊敬を示すのではなく、彼に恥をもたらししていました。名誉をたたえるのではなく、その栄光を地に落とそうとして彼を攻撃していました。しかし、そのような彼らに対して、ダビデは嘲笑を兼ねてこのように言います。「いつまでわたしの栄光をはずかしめ、むなしいものを愛し、まやかしものを慕い求めるのか。」と。ダビデは特に彼らの二つの特徴を指摘し、彼らのしていることがいかに愚かなのか非難しています。

まず彼らの特徴の一つ目として「むなしいものを愛」するということが挙げられています。ここに出てくる「むなしいもの」というのは「空っぽなもの」とか「価値のないもの」を表しています。また彼らは「むなしいものを愛」するだけでなく、「まやかしものを慕い求める」という特徴も持っています。これはいわゆる嘘のことです。要するにこの身分の高い者たちの生き方はいつも価値のないもの、すぐに消え去ってしまうようなもの、嘘を愛し、偽りを追い求めるものだったということです。彼らの心はそんな間違っているもの、嘘や偽りで満ちていました。聖書は、正しいことを喜ばない愚か者の姿をこのように描いています。箴言18:2「愚かな者は英知を喜ばない。ただ自分の意見だけを表わす。」とあります。また、このような愚か者である身分の高い、ダビデに敵対する人物たちの心が偽りで満ちていたからこそ、口から出てくるもの、愚かなことばを発するのだと聖書は教えています。愚か者というのは心にあるものを話すのだと。箴言12:23には「利口な者は知識を隠し、愚かな者は自分の愚かさを言いふらす。」とあります。調べ物をしていておもしろいなと思ったのは、古代の哲学者プラトンはこのことに関して次のように言っています。「知恵ある者は何か話すことがあるから口を開くが、愚か者は何かを話さないといけなから口を開く」と。真理を欲さず、愚か者は心が偽りを求めているからこそ、彼らの行う行動はすべて正しいものではありません。そして何よりも問題なのは、この愚か者は自分たちが「むなしいもの」を求めている、「むなしいもの」を生きがいとしているということに気づけないということです。

だからこそダビデはそんな彼らを戒めるのです。あなたたちは私のことを非難し、辱めようとするけれども、あなたたちの生き方こそが愚かで恥ずかしいものだ。またダビデが彼らを非難したのは、なにも彼らの生き方が「むなしいもの」を求めていたからだけではありません。そもそも彼らがダビデに対してしていることが無意味なことであったからこそ、そのむなしさを彼らに突きつけるのです。

続いて彼は3節で「知れ。主は、ご自分の聖徒を特別に扱われるのだ。私が呼ぶとき、主は聞いてくださる。」と言っています。ここでダビデが言わんとしたことは神様は主の前を正しく歩む者、主の愛を受け、主との関係を持つ者を特別に愛してくださるということです。ダビデは自分が主に選ばれ、油注がれた王であることをよく知っていました。だからこそ確信を持ってこう言うことができたのです。主は私が信頼する時必ず答えてくださると。これは私たちにとってもすばらしいニュースです。私たちが困難の中にある時、特に私たちの周りの人があなたを不当に責め、あなたに関する嘘を周りに広め、陥れようとする時に、私たちはそのような人に対してこう宣言することができるのです。あなたたちが何をしても大丈夫、私を救ってくださった神はどんな状況にあっても私を守り、特別に扱ってくださると。

ここで私たちが決して当たり前にはいけなことは、本来私たちは誰ひとりとしてこんな愛、こんな恵みに、こんな守りに値する者ではないということです。私たちはこれまでダビデの敵の姿を見てきて、ああ、この人たちは余りに愚かだ、むなしいものを生きがいとし、嘘に信頼し、価値のないものを追い求める、そんな愚かな生き方だと、もしかしたら思われたかもしれません。しかし、私たちこそ生まれながらに愚か者です。私たちはこれまで主がどれほどすばらしい福音を私たちの前に示したとしても、どれだけイエス・キリストのすばらしさを教えられたとしても、救いを得る以前の私たちはそれがどんなにすばらしいものかをわかることはありませんでした。どれだけ人がキリストのうちにのみ私たちの宝があるのだと言ったとしても、私たちはそんなものに目を配るのではなく、自分が思う価値あるもの、むなしいものを生きがいとして生きていたのです。真実を否定し、嘘を信じ、自分勝手に生きているそんな愚かな者たちでした。

そのような私たち愚か者に値するものは愛ではありません。私たちに値したものはさばきだけでした。私たちはこの中において主を知るまで誰ひとりとして「アバ、父」と神を呼ぶことができる資格を持っている者はいませんでした。しかし、主イエスが十字架に架かり、死んでくださったことによって、私たちの心は新しく変えられ、神の家族へと招き入れられ、そしてキリストの愛が私たちのうちに脈々と注がれることになったのです。そしてこの愛が私たちをどんな敵からも、苦難からも、苦しみからも、試練からも、迫害からも守ってくださると。ローマ8:35、38-39「私たちがキリストの愛から引き

離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。……私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」とあります。ですからもし、この中にこのすばらしい主の愛を知らない方がおられるのであれば、ぜひきょうその愛を知って帰ってください。この愛を知っているとされている皆さん、私たちはこの愛によって完全に守られているのです。主の愛のうちに完全に守られている者を非難することは愚かなことだとダビデは言います。主はご自分のものを愛し、特別に扱ってくださるといふ確信を持って私たちはきょうを歩むことができるのです。

2) 中傷されたことで怒りを覚えるダビデの仲間 4-5節

二つ目のグループはダビデが中傷されていることで怒りを覚える彼の仲間たちです。

ここで内容を考えていく前に少し覚えておいてほしいことは、私たち信仰者の歩みにとって、兄弟姉妹は必ず必要なものだということです。私たちクリスチャンの歩みは個別でできるものではありません。私たちの歩みにはいつも同じ主を愛し、同じ主を喜ばせようとする兄弟姉妹が欠かせません。同じようにさまざまな試練を経験します。同じようにさまざまな苦しみを経験します。同じようにキリストに似た者になろうとする、そんな兄弟姉妹が私たちには与えられているのです。私たちの責任はひとりひとりに正しく向き合い、困っている時にはその真理をもって教えることです。まさにここでダビデはそのことを実践していました。

彼は4節の中で「恐れおののけ。そして罪を犯すな。」と命令を与えています。この「恐れおののけ」ということばは、「からだが震える」という意味があり、怒りや恐れ、不安といった感情と結びついてよく聖書で用いられます。だからここで、先ほどまで見てきた敵に対して愚かなことをするのはない、恐れおののいて罪を犯すなとダビデが命令しているとも当然できます。しかし、七十人訳聖書やこの箇所を引用したパウロのエペソ4:26のことばに基づけば、ここは「怒っても、罪を犯してはなりません。」ともとることができます。ダビデの置かれていた状況を少し想像してください。ダビデは敵に囲まれ、さまざまな嘘や不当な扱いを受けて恥をかかされ、苦しみの中にいました。しかし、彼は同時にひとりではありませんでした。彼の周りには同じように忠実についてきた人々がいたのです。そしてその人たちは、自分たちが愛し、尊敬する王が中傷され、不当な扱いを受けているのを見る時に怒りを持ちます。聖書は怒ること自体がいけないとは教えていません。むしろ罪や不義を憎む正しい怒りは主に喜ばれるものです。しかしその怒りが自分勝手、自分本位のものになることをよしとはしていません。なぜなら正しくない怒りが直接罪へとつながることがあるからです。私たちも良く知っているカインとアベルの話の思い出していただければ、この世界に起きた最初の殺人の原因となったものは怒りでした。だからこそダビデは怒りを持っている者に、怒ってもそれを間違った形で用いてはいけない、罪を犯してはいけないと教えたのです。

そしてまた、そんな怒りを持っている者たちに続けて、「床の上で自分の心に語り、静まれ。」と励ましています。これはことばどおりです。ダビデはもし怒りを持つことがあるのであれば、黙って自分の寝床に行き、だれも傷つけることのない場所であって主の前に静まりなさいと教えたのです。

私たちが怒りを抱く時、私たちはその怒りをすぐにことばや行動で表現したりしていないでしょうか？ 私たちはことばに気をつけなければいけないと箴言は繰り返し教えています。箴言21:23では「自分の口と舌を守る者は、自分自身を守って苦しみに会わない。」と記しています。また、もしかしたら、こうして怒りの話を聞く時に、このように思われているかもしれません。私は確かにかつてはすぐにかつとなって衝動的な行動をとったりしていたけれども、今もうそんなことはしていません。そんな怒りの問題は私は持っていませんと思われるかもしれません。もしそう思うのであれば、このエドワード・ウェルシュという人物が記したリストに目を通してみてください。カウンセリングの本を記したこの人物は怒りというものがさまざまな側面、少なくとも三つの性質を持っているのだと著書の中で記しています。一つ目は隠れた怒りというものがあることを教えています。これは不平不満を言うこと、ゴシップをすること、自己防衛をすること、いらいらすること、執念深いことです。二つ目に冷たい怒りというものもあります。これは人を無視したり、人から距離をとったり、関わりを避けたり、無関心でいたり、人の過ちを数え続けていたり、非難することです。また三つ目に熱い怒りというものもあります。これはねたみや激怒、殺人や口論、憎しみや暴力、いじめといったものを含んでいます。

さて、このリストを見た後で、あなたはどんな怒りを覚えやすいでしょうか？ どんな怒りの問題を持っているでしょうか？ 私たちはこのような怒りを持ったまま発言したり行動したりしていないでしょうか？ いつまでも怒りを心の中に抱え続けてはいないでしょうか？ もし正しくないそんな怒りを持っているのであれば、神に喜ばれることはありません。また周りの人もそれによって傷つけることがあります。

怒りを持っているということは自身が平安を失うだけではなく、ほかの人の平安も奪い取ってしまうことがあります。だからこそ怒っても「罪を犯すな」とダビデは教えます。

ただ単にダビデは怒りを持ったなら寝床に行って静まればいいと彼らに教えませんでした。彼は続けて「義のいけにえをささげ、主に投げ頼め。」とも言ったのです。「義なる神」は義のいけにえしかお受けになりません。正しくない怒りを持っている者は主の前に静まり悔い改め、そして神に喜ばれる心をもって主を礼拝することが大切です。ダビデは詩篇51：16-17で「たとい私がささげても、まことに、あなたはいけにえを喜ばれません。全焼のいけにえを、望まれません。神へのいけにえは、砕かれた霊。砕かれた、悔いた心。神よ。あなたは、それをさげすまれません。」（新改訳3版）と言っています。私たちは怒りをそのままにするのではなく、悔い改めて赦すことを学ばなければいけません。そして、その上で正しいいけにえを捧げ、主に信頼するのです。

私たちが普段生きてると、自分の心や考え、感情といったものが少なからず信頼できるものだと考えて行動していることがあります。しかし、聖書はそのようには教えてはいません。箴言28：26では「自分の心に頼る者は愚かな者、知恵をもって歩む者は救われる。」とあります。皆さん私たちは絶対に忘れてはいけません。私たちの心や考え、それは生まれながらに罪の影響を受けています。だからこそもしそれにのっとなっていろいろなことを決めていくのであれば、それにのっとなって行動していくのであれば、必ずそこで過ちを犯すのです。私たちは自分の心ではなく、決して間違いのない、いつも正しい主に信頼して生きていくことが必要です。そしてここに私たちを平安へと導く知恵があります。

3) 希望を失い悩むダビデの仲間 6-7節

そして最後の三つ目のグループは希望を失い悩むダビデの仲間たちの姿が6-7節に記されています。6節「多くの者は言っています。『だれかわれわれに良い目を見せてくれないものか。』」と書いてありました。これまでも私たちが見てきたように、ダビデの置かれていた状況は想像を絶するほど辛く希望の見えないものでした。そんな彼について来た友人たちは、そのような状況、余りの苦しみを見る時に、悲しみ、思い悩んでいたのです。こんな状況にあって、これから本当によいことが起こるのだろうか、こんな苦しみの中にあって助け出されることがあるのだろうか、主の憐れみが私たちの上に示されることがあるのだろうか——。今の私たちも同じような気持ちを抱くことがありますし、また同じように苦難を経験する中にあって、希望を失っている兄弟姉妹を目撃することもあつたりします。そんな時、皆さんならどのようにしてその人物を励ますでしょう。ダビデはそんな思い悩む友人たちに、6節「主よ。どうか、あなたの御顔の光を、私たちの上に照らしてください。」と願っています。言い換えれば、主が愛を示し、祝福を与えてくださることを祈り求めたのです。

そして7節に「あなたは私の心に喜びを下さいました。それは穀物と新しいぶどう酒が豊かにあるときにもまさっています。」と、続いています。この当時イスラエルの人々にとって穀物を収穫することは最高の喜びをもたらす瞬間でした。考えてみてください。農家の人たちは、土地を耕し、水をやり、手入れをしながら1年間、この収穫の時を楽しみにしながら、日々の働きを頑張っているのです。自分の頑張っていたことが実った時、この上もない喜びをその人にもたすのです。しかし、ダビデは私が持っている喜びはそんな収穫の喜びよりも、この世が考える最高の喜びよりもはるかに勝っているものだというのです。主の喜びが心のうちにあると、その喜びでいつも満たされていることを感謝しました。たとえどれだけ悩ましい状況にあったとしても、主に信頼すれば、この世が絶対に与えることのできない主の喜びが私たちの心にも与えられるのです。置かれている状況は変わらないかもしれませんが、経験する試練はますます苦しくなるかもしれません。しかし、どんな状況にあったとしても、主から与えられる喜びさえあれば、その人の心は平安を持って歩んでいくことができるのです。これこそが主に確信を置く者の本当の平安です。

3. 主は平安を与えてくださる 8節

そして最後に、信仰者が持つべき三つ目の確信が8節の中に記されています。「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ、眠りにつきます。主よ。あなただけが、私を安らかに住まわせてくださいます。」と。三つ目の確信は主が平安を与えてくださるといふ確信です。これまでも見てきたとおり、この詩篇4篇を記したダビデの置かれている苦しい状況には変わりはありませんでした。彼は変わらずに自分の愛する息子アブシャロムに命を狙われ、彼の敵は彼を見下し、さまざまな嘘をもって彼の名譽を傷つけ、彼の心は打ちひしがれるような状況にあったのです。必ず周りには間違っただけの怒りを持つ者や思い悩む者たちがいました。彼の置かれていた状況は何ら最初と変わらず、誰が見ても喜ぶことのできない苦しいものでした。しかし、彼の心は最初とは違いました。恐れや不安、悲しみを抱いていた彼の心は今安らぎ、そして平安を持って眠ることができたのです。

一体どうして彼はこんなふうになれたのでしょうか？それは平安を与えることができる主に彼が確信を置いていたからです。ここで私たちにとっても大切なこと、それは本当の安らぎというのは

私たちの置かれている状況に左右されるものではなく、苦難の中にあって、主に確信を置く者が味わうことのできるものだということです。状況に左右されない、変わらない主にあるからこそいつも変わらずに平安を持って生きていくことができると。私たちも試練に遭う時、時に言いようもないプレッシャーを感じ、不安や恐れで心が重く、逃げ場がないように感じ、希望の見えない現実が眠れない夜をもたらすことがあるかもしれません。そんな時にどうすればいいのか——。ダビデの姿にならうことです。平安を与えてくださる神様に信頼し、この方にすべてを委ねて身を横にするのです。そうすれば、主は私たちにも同じ安らぎを与えてくださる。これこそが主に確信を持つ者の本当の平安です。

○まとめ

さて、きょう私たちはダビデから信仰者が持ち続けるべき確信について学んできました。信仰者はどんな確信を持つことができたのでしょうか。私たちの主は祈りに必ず答えてくださる。私たちの主は信頼に必ず答えてくださる、そして私たちの主は平安を必ず与えてくださるお方です。この神にいつも目を向け、この神の約束を信じ続けたダビデは、絶望的に見える苦しみの中でも平安を持って歩むことができました。主への確信、これこそが信仰者の平安の基盤です。

主に揺るがぬ確信を持っていたからこそ最初に見たポリュカルポスも、またかつての信仰の勇者たちも皆迫害の中にあっても、苦しみの中にあっても、悲しみの中にあっても、どんな試練の中にあっても平安を持って歩むことができました。同じ神がきょう皆さんとともにいてくださるのです。同じ平安が私たちにもきょう与えられています。どんな苦しみに遭ったとしても私たちはきょうこの主に確信を置くのであれば、主にあって安らぎを持って眠ることができる。主にあって希望に満ちた歩みをしていくことができるのです。この主に確信を置いて忠実に歩んで行きましょう。私たちの主は平安のうちに私たちの身を横たわらせ、どんな状況にあっても安らかに住まわせてくださることができる、こんなお方です。